

第1問 日本創生会議は全国の896自治体が「消滅可能性都市」に該当すると発表した。消滅可能性都市とはどのような都市のことか。また、その原因をいくつか挙げよ。

消滅可能性都市とは、少子化や人口移動に歯止めがかからず、将来に消滅する可能性がある自治体を指す。具体的には、20～39歳の女性の数が、2010年から40年にかけて5割以下に減る自治体が該当する。子どもの大半がこの年代の女性が産んでおり、次の世代の人口を左右するためだ。青森、岩手、秋田、山形、島根の5県では8割以上の市町村に消滅可能性があると考えられた。また、都市部では東京都豊島区も含まれている。原因としては、社会全体の少子高齢化や首都圏への一極集中が進んでいるだけでなく、地方には①雇用の場が少なく若者が定住しにくい、②育児面でも教育機関が充実していない、③伝統文化は抱負でも新しい文化が生まれていない、など若者をひきつける条件を欠いていることが挙げられる。

第2問 自治体の機能が維持できなくなった場合、環境面ではどのような影響が出てくるだろうか。考えられる影響を2つ以上挙げて検討せよ。

水田や畑は人の手が入らなくなると、数年で荒地になり、原野同然になる可能性がある。このような場所は動物のすみかになることが考えられる。また、森林も手入れを怠れば、特に人工林は荒れるだろう。間伐や枝打ちがされずに日光が当たらないスギやヒノキの林にの土壤は保水力を失い、少しの雨で土砂が流出しやすくなる。山間地の荒廃は、河川を通じて平野部に洪水などの災害を引き起こす可能性がある。さらに、家屋やコンクリートの建造物が放置されると、そこにあったものが廃棄物の状態となって環境を汚染したり、害獣の繁殖場所になったりすることが考えられる。

第3問 過疎化、高齢化の同時進行により、近年農村部には耕作放棄地が急増している。耕作放棄地とはどのような土地か。また、それが増えることでどのような問題が発生するか。

農家の後継者不足で全国的に耕作放棄地が増えている。特に兼業農家の耕作放棄地が多く、6割を超えるという調査がある。耕作放棄地とは「過去1年以上作付けされておらず、今後もされる予定のない農地」と定義される。遊休農地は「農地の利用の程度が周辺より著しく劣っている」農地を含むため、耕作放棄地のほうが範囲が狭いとされる。耕作放棄地が増えることで、次のような問題が発生すると考えられる。人の手が入らないため荒地になり、病虫害や鳥獣の棲家になり、そこを拠点に繁殖したそれらの生物が周辺の田畑の作物などに被害を与える。水田は大雨の際に水を蓄える機能があるので、荒地になるとその機能が失われ、下流域に土砂災害や洪水を起こしやすくなる。ゴミの不法投棄場所になり、環境を汚染したり、景観を損ねたりする原因になる。さらに、耕作面積の減少につながるため生産量の減少、食糧自給率の低下につながる。

第4問 獣害を引き起こす動物にはどのようなものがあるか。また、獣害を防ぐためには具体的にどのような取り組みが必要だろうか。課題を挙げながら具体策を企画せよ。

獣害を引き起こす動物として、哺乳類ではイノシシ、サル、シカ、クマ、タヌキ、アライグマ、鳥類ではカワウ、カラスなどが挙げられる。これらの動物は人里において農作物や養殖池の魚を食い荒らし、農村部の生産活動に被害を与えることがある。一般的な対策としては防護ネットを張り巡らす方法があるが、予算や管理の手間などに課題がある。また、イノシシやシカは猟友会や猟師によって銃やわなで駆除する方法もとられている。この場合、駆除した動物の処理が問題となるが、ジビエ料理店や地域おこしで開発されたご当地バーガーの食材として提供されるなど、利用方法の研究が進んでいる。しかし、私はこれらの取り組みだけでは不十分だと思う。動物が増えすぎたり、人里に現われたりする原因にメスを入れるものではないし、過疎化・高齢化と耕作放棄地などの拡大が進んでいる現状を考えると、人手が少なすぎると感じるからだ。私はまず動物の生態と人里に現われる原因を調べ、講習会を開いたりしてその知識と考え方を地域の人々に共有してもらうことが大切だと思える。そして、広大な耕作放棄地や荒れた森林がこれらの動物の生息地になるのを防ぐためにも、それらを都市部の人々に開放すべきだ。具体的には、農業に関心のある人たちや企業に農園や里山として積極的に貸し出す。目的は趣味でもいいし、事業目的でもいい。こうして新たに農業に参加した個人や企業にも害獣の被害の知見を広め、農村部の人たちと同じ問題意識を持ってもらう。この面によって獣害対策に当たるマンパワーを増やしていくことができる。荒れた山村を食糧の供給地に再構築で

